



12年前日記

2000年1月25日
(火)

山田夫妻

『12年前日記 2000年1月25日(火)』

【2000年1月25日(火)】*2012年1月25日(水)記

10時30分、起床。はい、じゃあ、みんなでせ～の～、ちこくだ～！！！！あっちゃ～、やってもうたですよ。そりゃ、腕時計を見て、愕然としましたよ。目を疑いました。まさかこんな一番しちやいけない日に、一番しちやいけないことを。いるよね、ここぞというときに考えうる中で一番アレなことしちゃうの。遅刻力。ははは、きっと夢だ、夢オチ。夢かうつつか。夢に三千点。うつつ、うつけ、うつぼ、ハイハイ、寝坊しましけど何か？ しかも超寝坊ね。平静を装って、寝覚めの一本、タバコのことね、紫煙をくゆらせながら、己の心の声に問いかける、起こせよ、馬鹿、ちゃんと起したもん。寝坊、やっちまった、いや、今日は時差通勤だった、もしくは重役出勤ってことで。企業戦士の朝は早い、12時起床、もうお寝坊さんなんだから。誰にでも経験があるたった一度きりの一夜の過ち、その名も夜更かし。大事なのは労働開始時間じゃないし、労働時間でもないし、労働意欲なんてクソくらえ。労働の質。寝る前に荷造りくらいしておけよ。成功報酬は無理でも、失敗報酬ならたんまり。さ、後はもう遅刻だ～とトーストを食わえようとして気付く。パッキングしてねえじゃん。昨晚の俺、しかも夜食はしっかり食ったのに、トチ狂っていたのでしょ、何の用意もしてないことに気付き、しかもパッキングしてねえし。コイツ、ホントバカじゃねえの。鬼早で荷物を詰め込む。朝も遅からパッキング。今更だけど、荷物多過ぎ。今まで溜めに溜め込み爆発寸前だった勤労意欲の大半をココですべて放出して無駄に費やす。なんかドツと疲れちゃった。ペース配分を間違えた模様。11時、夜逃げするように、チェックアウト。超寝坊した、遅刻だ～とトーストをくわえながら、チェックアウト、はいはい、ええ、ウソですよ、ウソっす、チェックアウトしてねえよ(嘘嘘)と定かでないまま、駅に向かう。う～ん、でも本当にチェックアウトしたかなあ(時効時効)、そういや払ったかなあと定かでないまま、今度こそ本当にメータータクシー(60B)でフォアランポーン駅へ。ちょっとデブなんて、駅のサービス係りの姉ちゃんにからかわれながら、元マッチョだもんとラチャブリまでの切符を購入(65B)。どうやって顔で誘ったが、事件のことを知らないみたい。あんな恐ろしいところに乗り込むなんて素敵みたいな展開にはならず。さっきのメータータクシーとほぼ同額。ほら、やっぱり電車の方が安上がりっしょ、昨晚タクシーをチャーターしちゃった日には財布片手に、メーターの料金が全財産分と同じ額になった瞬間に、降りま～ずって真っ暗闇の見知らぬ土地に降りて、即立ち往生、今頃は路頭に迷っていたはず。それがアータ、あっちの俺がそんな目にあっているのに、こっちの俺はちょっとコーヒーブレイク中(25B)。発車時刻は12時25分なので、まだ時間に余裕がある。ちょっと早く着き過ぎちゃったかしら。もう少し早ければ一步の差で逃した一本前の電車に乗れたのに。早く朝昼兼用の飯は向こう、旅先に着いてから、もしくは車内で駅弁も悪かない。おかしは買い込む。腹が減っては戦ができんと、大量の水と菓子を買込み(56B)列車に乗り込む。否が応にも高まる遠足気分。いけない、コレはあくまでお仕事だからと自分を制すも。ちなみに、俺は知っている、この駅のトイレは金を取るのだから我慢する、他にすることもないしね、おっしこ我慢するくらいしか。確か●B。●回おっしこを我慢したら、ラチャブル行ける値段だ。あ、でも、もちろんウン

コだったら話は別さ。金を払ってでも、とそんなことを考えているといっけねえ～、さあ、もう時間だ。いかなきゃな。世界一の男がリングで俺を待っている、まだかまだかとあいつは一体いつくるんだと。待ってろ、小次郎。12時25分、ファランポーン駅を出発進行。もちろんこの時点ですら、この期に及んですら、未だに当時の俺はどんな事件が起っているか、国際電話の情報のみ。だからって、テレビを見てみようとか、新聞読んでみようとか思わない。新聞を買うとかの知恵は回らない、金も回らない。だって、タイ語や英字新聞を買ってもねえ。メディアなんて嘘ばっかだ。内部告発だ。メディアの端っこからずり落ちてる、バカ正直な俺が言うんだ少しは信憑性があるだろう。2000年の俺は日本のママから仕入れた情報のみでどうしたかと言うと、男やねえ～、ホント大馬鹿さんなんだから。第一、こんな土壇場でジタバタと慌てたって仕方ない。いつも通りでいいんだよ。そもそも現場主義だから。自分の目で見たことしか信じない。そういうタイプだったのか。後、8時間睡眠主義だから、後々主義と主義がかちあって、大変なアレなことになったのは周知の通り。何が起きているか読者の方も気になるかもしれない。もう余計なおせっかいのおかげで知ってるか。しかし当時の俺は無鉄砲にも何も知らないままそんな状態で南に向かう列車に飛び乗ったのさ。まさに青春だねえ。百姓の血が、一揆をしてえ、祭りだ祭りだ、ええじゃないかええじゃないか。それにしてもスカイトレインと違い、まさにザ・鈍行列車しかも三等席って感じで、スラム街みたいな座席に腰掛けて、車窓から自転車のおばさんが抜かしていく光景などをボンヤリ眺める。チンタラチンタラスラム街を走っていく。もし間に合わなかったら、絶対お前のせいだからな、バカ鈍行電車め！まあ、こういうのは運命だから、本当に結ばれる運命なら、どんなに遅れても間に合うし、結ばれない運命なら、どんなに早くても間に合わない。そういうもんさ、どうかそういうもんであってくれ。郊外に出て、徐々にスピードをあげてきた戦場行きの電車の車窓から、動き出した車窓から、流れ行く景色を眺めていたら、もしかしたらこの景色を見るのも最後かもなんてちょっと感傷的&ちょっとしたプチ旅行気分が嫌が応うにも身体の奥底から盛り上がってきて、気分上々。ほとんど電車に乗って、ソープに向かう童貞気分だ。でも、終点はソープじゃない。戦場なんだ。そうさね、戦場に行くのに、和気藹々とまるで遠足気分のところが、なんかちょっとベテランジャーナリストっぽいな、よく知らねえけど。あ、ごめん、浮かれすぎ？ いいじゃん、ちょっとくらい浮かれて饒舌でも。でもね、ホントはぼくちゃん、戦場童貞だから、「ついに俺は戦場に行くんだ」と自然とにやける顔に水を差す。少くくらい浮かれてもいいじゃねえかよ。まあ、しばらく黙って聞いてくれ、てか、音読派は読まんでくれ。もし万が一教科書になって、作者のこのときの気持ちを四文字の日本語で書きなさいって問題が出たら、オマンコが正解だ！ お前らみんな100点満点！俺は200点満点、だってよう、こんな日を10年いや、四半世紀近く待ち侘びていた。タイについてからのつらい日々は知ってるだろ。バリバリ実力はある登山家なのに、どの山に登ればいいのか、どの山に登りたいかすら分からない、そんな状態で10年、四半世紀っすわ。その待ち人がついに来たり。この心が分かってたまるか、お前ら如きに。分かってたまるか。わけてやるもんか！そりゃあ、もしかしたら、流れ弾にでも当たって、殉職するかもしれない。それもまたよし。ある意味、それもまたビギナーズラック。テロリストと警察や軍隊。対峙し、弾が飛び交うかもしれない。恐怖なんてない。まさに知らぬが仏。落馬したことなけりゃ、落馬の

怖さも分からないだろ。嫌が応にも高揚感が高まるばかり。13時過ぎにはにっちもさっちもいかず、もう昼寝。まあ、腹がふくれて、気分がよくなりゃ、鼻歌のひとつも。しかもこれからの激務に備えて束の間の休息のダメ押しが必要で、更に南国特有のお昼寝の習慣がついていたばってん、グーグー、英訳zoo。14時、野生の勘、いや、研ぎ澄まされたジャーナリストの嗅覚で、事件の匂いを間近に感じたのか自然とパチリと目を覚ましてから、かれこれ小一時間も経ってようやくラチャブリ駅に到着。長い道のりだった。幾多の困難を乗り越え、何度もくじけそうになりながらも、みんなの助けを借りて、よくぞ、ここまで...すごいぞ、俺だけ。俺は元一杯不眠不休で24時間戦える。既に疲れ果てた早漏どもを蹴散らし、オラオラ取材の真髓を見せてやる。ついに後生大事にいつも背中に背負って、塩を吹きまくっているカメラバックの中のビデオだカメラだが活躍できる 때가。自称プロ戦場特派員よしおとよしこ見参！ヒーローと俺は遅れて現れる。例えココで死すとも悔いなし、今までの集大成をみせてやるぜ、今まで一度も見たことのないような、でっかいきれいな花火をジャンジャカ打ち上げてやるから、お見逃しなく。15時、ラチャブリ駅着。電車を降りてブルブルと武者震い。さ～て、どこへ行ったもんか。まあ、病院だわなあ、妥当なところで。でもパッと見た感じ、バンコクから列車で3時間ほどのラチャブリーは大事件が起こっているとは思えない、まるで夏祭りが終わったように静かな街だった。なんとなく玄関開けたら二分でごはんノリで、駅を出たら、目の前が病院でドンパチやっていると勝手に思い込んでいたが、そこそこ広い街みたいだ。さ～て、切符切符、どのポッケだっけ。右のポッケにはたばこ～、左のポッケには小銭～、いざとなったら、この小銭をまき散らして逃げる算段だ。さ～て、どこへいったもんか、どうしたもんか。病院の場所は俺の某国の唯一の情報源にコレクトコールをかけようと思ったが、さすがにそこまで把握してないだろうし、ホント使えない、首だ首、そもそも電話を探すのが面倒くさいので、改札にいた親切そうな駅員さんにカレン族の過激派に占拠されている病院の場所を小声で聞いた。「ラチャブリ、ホスピタル、カレン、フェア？（訳、先日ラチャブリの病院でおきたカレン族が襲撃し、占拠しているという病院はどこだね？さあ、早く答えろ、調べはついているんだ！）」。と駅員さんは笑いながら教えてくれたそうだ。「オオ～、ツデーモーニングオールフィニッシュ！（傷心の俺に訳せと言うのですか？ ええ、ええ、訳しますよ、訳しますとも、訳さずにおくものでか、カレシ曰く、事件は会議室で起きているんじゃない、現場で起きているんだとかなんとかでいいんじゃない、好きだろ、こういうのエッ？ 学校とかで流行ってるんだろ？ ちゃんと知ってるんだぜ、トレンドイなことトレ通だから）。はい、終了。撤収撤収。とっとと帰った帰った。ほら、散れ散れ。おい、コラ、いつまで見てんだ、見世物じゃねえぞ。あ～あ、もう馬鹿馬鹿しくてやってらんないね。どうせこんなオチだと思いましたよ。どうせ俺なんて古本売買に身を落として、せっせと精を出していればいいですよ～だ。ハレー彗星並みの幸運すぎる棚ぼた事件をものにする事なく。類は友を呼ぶというか、トラブルメーカーというか、とつてもラッキーマン。こうなるなら、一生こんな事件知らなくてよかった、少なくともタイにいる間に知ることはなかったんだ、あの電話がなければ、全部お母さんが悪い！いや～、それにしても、なぜタイ人、こんなときに限って迅速な行動を...。取材パスはのらりくらの挙句、出さないくせに。この瞬間、つまりラチャブリ駅の改札で情報を仕入れた15時過ぎの時点で、人生最初で最後

のビックチャンスは終わりを告げた。まあ、救いは一本前の電車でも、昨晚車を走らせても、早朝に間に合ったかどうか。経費ロスが往復の電車賃で済んだと思えばつらくないもん。でも、なんか疲れちゃった。ねえ、ちょっと泣いてもいい？ 中2から10年以上、いや、生まれたときからなら四半世紀近く張り詰めていた緊張の糸が切れた。もうプツンと切れたね。プツン女優の気持ちが初めて分かった。なんだこの駄洒落。10年以上張り詰めていた緊張の糸が切れた。もうプツンと切れたね。心がポキリと折れた。俺のは、取材パスが貰えないくらいでポキリと折れそうなピュアハートだから、強心臓自慢の俺ですら。それはかろうじてもちこたえてきたけど、もうあきません。パッリ〜ン。そういうとき、人間はどういう行動を取るか分かりますか？ 分かんねえだろうなあ、レールの上のぬるい人生を生きてちゃ。周りをぐるりと見渡しゃ、何年後だ何年前だのサンプルだらけ。浪人して挫折気分はせいぜい浪人、二浪したら苦勞人気取り、単なる馬鹿だ怠け者だが足踏みしただけ。レールを外れて、味わう本当の挫折は怖いぞ。あてどもなくトボトボと見知らぬ街を歩く。群がるツウクツウクやバイクタクシーのドライバーも消えた。もう意気地なし。今がチャンスなのに。誰でもいいから抱いて。病院を見に行く。病院を探して、後の祭りでも見に行こうかとも思ったが、ううん、また嘘。今、思い出したが、せめて病院くらい見に行こうなんて殊勝なことはまったく考えなかった。新聞すら買わなかった男が、終わったモンをほじくり帰してどうすんだ、傷口に塩を塗りつけるような下衆な真似。俺は下衆は下衆でも、違う種類の下衆だから。第一そんなすぐにやられちゃうようなゲリラに興味はない。誇り高き一流自称プロ戦場特派員のプライドがそれをゆるさなかった。てか、ぼうぼう燃えてるから野次馬だ火事場泥棒だが集まって賑わうんだ、燃え滓見に行くのは当事者と警察と放火魔くらいだ。もしくはそんなこっぴどくフラれた女の家をこっそり見に行くような真似ができるか。ストーカーじゃあるまい。とりあえずどうしていいのか分からないところに、目を上げて、たまたま目についたのがケンタッキー、エッ、こんな地球の歩き方にも載っていないような小さな町にあのケンタッキーが！ コレは夢か現か。こういうときこそ、予期せぬ事態にも慌てず騒がず落ち着いて咄嗟の判断が求められる、自称プロ戦場特派員の真の成果が問われる。自称プロ戦場特派員たるものこうすべし。ヤケ食いですよ、鳥を。コンチキショ〜、コケコッコ〜てな具合に。やけ食いですよ、鳥を。どんな類の涙も流れない。だって涙を流してもぬぐえないじゃん、こっちは手がベトベトしちゃってるんだから、ちょっとコレどうすんのよってなもんよ。これこそ、由々しき根源的ケンタッキー問題ですよ。16時過ぎ、なんかケンタッキーをヤケ食いしたら(69B)、挫折からやや立ち直って、少し気分がよくなったのでタクシー(50B)で『Namsin Hotel』に乗りつけ、チェックイン(350B)。旅の汚れと疲れと両手のケンタッキー汚れを落とすこともなく、タバコを吸いに吸いっからず、ただ日が暮れていくのを、薄汚い部屋に差し込む光が段々薄くなってゆき、今日という一日が終わりに近づいているのをベットに腰掛けただ黙って見ているしかなかった。寝すぎて昼寝したくなかったし、ちょっとこういう自分に酔っている面は否めないよね。いやねえ〜、若いって暑苦しくて、心の底から馬鹿馬鹿しい。じゃあ、こうで。ラチャブリにて職場放棄し渡り歩く、漂白、放浪、流浪。とりあえず目についたケンタッキーに入る。死んだ鳥の死肉をムシャムシャ食べる。男泣き。男は顔で笑って、腹で泣く。お腹で泣きすぎたのかゲリになる。18時、久しぶりにタイ飯で夕飯(

67.5 B)。そういや、ラチャブリ慣れをしてないと気付いたが、もう明日バンコクに帰るからいいや。あ、もう帰るの？19時、セブンイレブンがないので雑貨屋っぽいところで水とジュースを買い込み(18 B)、ホテルに戻る。なんか調子が悪いなあ。風邪かなあと思っていたが、そういや、緊張の糸が切れていたのがあった。極限までピンピンに張られて、後は前に飛び出すばかりで、真下に落下。1時、就寝。(マスター、いつもの。というわけで、さっそく12年後の後日談。ちなみに後日っても12年近く経って、ようやくこの事件の全貌を明らかにしてみた。というか、今回調べてみて、へー、そういうことだったんだあって話。ラチャブリ事件は新聞沙汰になったのは3日間だけ、でも一面を飾った、夕刊だけど、間が悪い、2000年1月24日某新聞夕刊2面、1月25日某新聞朝刊9面、1月25日某新聞夕刊1面、1月26日某新聞朝刊9面。後追い取材、疑似取材。ちなみに昨日の俺が高いびきだった本日早朝、全員射殺されました。チャンチャン。俺に目をつけられたのが運の尽きさ、コイツらも自称プロ戦場特派員業界も。誇り高き一流自称プロ戦場特派員の祭り好きのプライドが、祭りに仲間はずれにされた、それをゆるさなかった。そして、12年後の負け惜しみですが、逆にモノにできなくてよかったよ。もし万が一、最初で最後の超大チャンスでモノにできてたら、初心を忘れて、何の節操もなく事件が起るたびに世界各国を飛び回る日々を送るハメになるところだった。まさに9・11の同時多発テロがおこる、1年半以上も前のお話。この事件の詳細を当時知っていたら、行くのをビビったかもしれないが気分は物見湯山。しかも結局物見遊山もできずに終わった。いまだ戦場童貞ゆえ怖いと思わない。知らないから怖いというのはない。戦場を知っているからこそその恐怖はもちろんない。だからこそ、いまだに自称プロ戦場特派員に、まだ見ぬ女体に想いを馳せる三十路童貞のような気持ちを保持している。カチンカチンの冷凍保存だ。さあ、果たして、2000年の俺はこの先果たしてどうするのか、諸君、これぞ、まさに2000年問題じゃないか。...ごめんちゃいな、言いたかっただけ)。

○本日の出費、「計算するのが面倒臭いから、各々で適当にしといてよ」B。ついでに一日の流れも「いちいちうっとうしいから誰か簡単にまとめといて」ジャ〜。

つい最近までこの事件の全容はよく分からなかったのですが、全然知りたくもなかったからね。

でも今さっき適当に検索してきたので、その検索結果の無断引用的発表をもって、説明と替えさせて頂きます。

●カレン兵士による病院占拠事件

<http://www.lookthai.com/jp/info/tplogodarmy.HTM>

1月24日「神の軍隊」を名乗るミャンマのカレン族ゲリラがタイの国境を超えラチャブリ県の病院を占拠し人質300人を盾にタイ政府に対しカレン族避難民への攻撃やミャンマ政府に対し援助を止めるよう要求しました。

このテロ行為に対しタイ政府は10月のミャンマ大使館占拠事件とは違う強行手段をとりました。10人のゲリラを全員射殺したのです。しかしこの政府の取った行動はタイ国民から支持を得ています。

1月24日カレン族ゲリラは病院を占拠した。そしてタイ政府に対し以下の要求を出した。

- 1)すぐにカレン族避難民への攻撃を止めること。
- 2)カレン族避難民の宿泊所を用意し怪我人を手当てすること。
- 3)カレン族と戦っているミャンマの軍隊に対する援助を止めること。
- 4)ミャンマ政府に避難民に対する攻撃を止めるよう圧力をかけること。
- 5)カレン族への攻撃を命令したタイ軍隊の責任者を罰すること。

これに対しタイ軍隊はカレン族避難民に攻撃したことは無いと否定した。しかし1週間前カレン族軍体と打ち合いになったことは国防筋も認めた。

ゲリラが主張する避難民への攻撃は12月19日と彼らと交戦したことに関係があるかもしれない。このときにはカレン族の地雷でタイ兵士4人が死んでいる。

「我々は越境して来る者に威嚇の射撃を行ったことがあるが彼らのミャンマ居住地に攻撃を行ったことは無い。また我々はミャンマ政府を助けているわけではない。」とスウラユッド将軍は彼らの主張に反発した。

その後ゲリラが武器を捨て投降し、人質を解放するならメディカルケアを考えても良いかもしれないとスウラユッド将軍は語った。

翌日1月25日5時23分病院内で爆発が起こった。タイ陸軍がテロリストせん滅作戦を敢行したのだ。それは1時間も経過しないうちにカレン族兵士が全員が射殺され成功して終了した。10人を射殺した行動に対し決断を下したチュアン首相は「彼らが残るか我々が残るかをかけた深刻な決断だった。」と語った。

ある報告では降伏したゲリラを射殺したらしいとあったがチュアン首相はこれを否定した。「彼らの人命人権が主張できるのはタイ人の人質が全員無事に開放されたからであって、もし我々の誰かが殺されていたら何故危険な彼らを射殺し守らなかったのかと言われるだろう。」とチュアン首相は語った。

10人全員射殺はやり過ぎではと言う人もいますが機関銃や手榴弾を持ったテロリストを相手にしている場合人質の安全確保のために全員殺すことがタイ政府が取った行動でした。これはタイ国民に支持されています。

日本政府でしたらどうでしょうか。多分人質が殺されてもこういう決断出来ないのではないのでしょうか。なぜなら命は同じく尊いものだからと言うでしょうね。

世界でそんな理想主義は通用しないかもしれません。自国民を守るのが軍隊・警察の役目の1つです。

以上、2012年の俺が未来の便利グッズ、ある意味、飛び道具たるネットの検索機能を駆使してお送りしました。

ちなみに、この病院占拠事件の3ヶ月前くらい、1999年10月にもカレン族関係者によるタイのビルマ大使館占拠事件なんて大事件もあったのね（以下の無断引用参照）、ちょうど1999年の俺は出発前のバタバタの時期で全然知らなかったわ、12年後の今の今まで。でも一切不便不都合不愉快なし。

●バンコク・ミャンマー大使館占拠事件の奇怪

1999年10月23日 田中 宇

<http://tanakanews.com/991023burma.htm>

もしあなたが、アメリカのビザをとろうと思い、東京・虎ノ門にあるアメリカ大使館を訪れたらちょうどその時に、武装したゲリラ集団が襲撃してきて、そのまま人質にとられ、24時間後に解放されたとしたら、どんな気持ちだろうか。

あなたが、日ごろからアメリカの世界戦略に反感を持っていて、しかも犯人たちが反米スローガンを掲げる人々だったとしても、自分を人質にしたゲリラを憎み、一刻も早く大使館から逃げ出したいと思うのではないだろうか。

ところが、10月1日から2日にかけて、タイの首都バンコクにあるミャンマー（ビルマ）大使館に立てこもったゲリラたちによって、人質にされた人々の反応は違った。襲撃から25時間後、タイ政府との交渉がまとまり、犯人たちが大使館を出る時、解放されることになった人質の一部は、ゲリラとの別れを惜しみ、涙を流したり、ゲリラと抱き合ったりした。

▼警報機は鳴らなかった

襲撃は、10月1日の正午前に起きた。5人のミャンマー人青年が、バンコクを中心街にあるミャンマー大使館にやってきた。5人のうち2人はギターケースを持っており、その中に機関銃「AK47」が隠されていた。大使館の入り口には金属探知器があったのだが、なぜか警報は鳴らなかった。

5人は大使館に入ると機関銃を取り出してかまへ、館内にいた全員を一カ所に集めた。大使を含むミャンマー人とタイ人の職員、それからビザをとりにきていたアメリカ人や日本人など、合計38人が人質となった。

「ビルマ学生壮士会」（Vigorous Burmese Student Warriors）と名乗る青年たちは、庭に掲揚されていたミャンマーの国旗を引き下ろし、代わりに孔雀を描いたビルマ反政府運動の旗を掲げた。そしてミャンマー政府に対して、政治犯の釈放や、1990年の選挙で反政府派が過半数の議席をとった選挙以来、全く開かれていないミャンマー国会を召集することなどを要求した。

それまで大使館は、バンコクに2000人ほどいる亡命ミャンマー人学生が、母国政府を非難するデモの際の目的地となることは多かったものの、武力によって襲撃されたことはなかった。ミャンマーの反政府運動が、非暴力の方針を貫いてきたことが一因だった。だが、周辺の状況からすると、襲撃はいつ起きてもおかしくなかった。

ミャンマーからタイへの政治難民が増えたのは、1988年8月8日、ミャンマーで大規模な反政

府行動が起き、政府の弾圧によって3000人以上が殺されてからのことだ。それ以来、12万人のミャンマー人がタイへ逃げ出した。国境沿いのタイ領内には難民キャンプが作られ、一時はそこを拠点に、機関銃などの武器を調達し、ミャンマー側に攻め込むゲリラ軍も組織された。

いくつかの報道を総合すると、襲撃犯は、国境沿いの難民キャンプからきた人と、襲撃の数日前にミャンマーから「バンコクに難民申請しに行く」とタイ側の係官に言って国境を越えてきた人の、混合グループだった。彼らが持っていたAK47や手榴弾は、国境付近にいるゲリラ部隊から調達してきたと考えられている。

タイとミャンマーは、歴史的なライバルだ。そうした背景もあって、タイは自国に入ってきたミャンマー人亡命希望者をあまり抑圧せず、いったん難民として認定した人には、国内を移動する自由も与えていた。難民キャンプでは武器が手に入りやすく、しかもバンコクに出てくるとも簡単である以上、ミャンマー大使館を襲撃しようとする青年たちが現れることは、時間の問題だったともいえる。

しかもこの大使館は、タイ当局による警備が甘かった。入り口に警察官が一人いるが、居眠りしていることが多かったという（AsiaWeekの記事による）。ミャンマー政府は、タイ政府に対して、大使館の警備を強化するよう求めていたが、改善されなかった。

▼「テロリストじゃない、民主活動家だ」

タイでは、民主化要求を弾圧し続ける隣国ミャンマーの軍事政権に対して批判的なマスコミや世論がある。タイ政府が、大使館の襲撃犯に対して厳しい措置を執らなかったのは、それが一因だった。犯人たちは、自分たちを難民キャンプのあるビルマ国境近くの地域に、ヘリコプターで連れていくよう求め、政府はこれに応じた。

ゲリラとの交渉を指揮したサナン内務大臣は、事件解決後に「われわれは、彼らをテロリストだとは考えていない。民主化のために闘っている学生活動家としてみている」と語った。大臣はまた「タイは仏教国なので、救いを求めてやってくる人々を見放せない」と、亡命ミャンマー人を擁護する発言もしている。

こうして、占拠事件は発生から1日で解決したが、タイ政府の寛容な対応は「テロ行為を容認している」として、ミャンマーや欧米諸国から批判された。なかでもミャンマー政府は、国営のメディアを通じて、襲撃事件は陰謀である可能性が大きい、などと批判した。犯人が大使館を出る際、人質たちから祝福されている姿をみれば、人質の中に犯人の仲間がいたのではないかと考えることもでき、それがミャンマー政府の不満になっていると思われる。

しかも当初ゲリラたちは、ミャンマー政府に対するいくつかの要求を掲げ、それが満たされない場合、人質を一時間に一人ずつ射殺する、などという声明を発表していた。だが、間もなく彼らの要求は、自分たちをヘリコプターで国境沿いの地域に連れて行け、ということだけになり、タイ政府との交渉がまとまった。

大使館への立てこもり事件といえば、ペルーのリマ日本大使館の事件が思い出される。あのときは、襲撃犯が出した要求項目をめぐり、ペルー政府との間で、何週間にもわたって、厳しい交渉が続いた。最後は、要求に応じられないフジモリ大統領が、危険を冒して強行突入に踏み切った。

その例でも分かるように、大使館占拠事件といえ一般に、ゲリラが政府に要求を認めさせるためにやるものであり、ぎりぎりの交渉が何日も続くのが普通だ。少なくとも今回のように、軍のヘリコプターに乗せてもらうためだけにやるものではない。

そう考えると、バンコクでの大使館占拠事件には、他の同様の事件とは別の種類の目的があったのではないかと推測できる。その目的として考えられることの一つは「9999」である。

▼8888と9999

ミャンマーで大規模な反政府運動が起きた1988年8月8日は「8888」だったが、数字に関する縁起を大切にしているミャンマー人が、反政府運動の次の節目として考えたのが「9999」、つまり今年9月9日だった。

だが9月9日を前にミャンマー政府は、民主活動家と思われる500人以上を逮捕するなど、取り締まりを徹底したため、当日はミャンマー国内では、ほとんど何も起きなかった。だが、ミャンマーでは経済が年々悪化する方向にある上、最近では市場でのコメの値段が上がったり、通貨チャットの対ドル相場が下落するなど、一般の人々の生活状態が悪くなっている。そんな中で、苛立ちを募らせた青年たちが、警戒の薄い隣国タイでの大使館襲撃を企てた、という可能性がある。

(ミャンマー人、特に現在の軍事政権が数字で縁起をかつぐことの代表例が、お札である。ミャンマーで発行されてきた紙幣の中には、15チャット、45チャット、75チャット、90チャットなどが含まれている)

88年に民主化が弾圧されてから10年が過ぎ、タイに亡命してきたミャンマー人による反政府組織がいくつも作られ、乱立状態の感がある。だが、祖国の民主化という目的は、ほとんど達成できず、袋小路に入った状態にある。

襲撃犯である「ビルマ学生壮士会」は、今年8月末に作られた新しい組織なのだが、彼らは、大使館襲撃という目立ったことをして、運動全体のじり貧状態をショック療法で立ち直らせることを目指したのではないかと推測される。だから、世の中の注目を集めただけで、襲撃犯は目標を達成し、再び国境のジャングルに戻ってしまった……。タイには、そんな風に分析する人もいる。

一方、ミャンマーの反政府運動はこれまで、全体の方針として非暴力を貫いてきたため、アウンサン・スーチー女史が率いる「国民民主連盟」(NLD)をはじめ、主要な反政府組織は、今回の武装襲撃を批判している。とはいえ「テロリズムは反対だが、暴力に訴えたい青年たちの気持ちは理解できる」というのが、ミャンマー人の「大人」たちの組織の本音のようだ。同様の立場は、海外の支援NGO組織や、タイ政府の反応からもうかがえる。

▼コソボと同じ「非暴力運動」の限界

この状況は私からみると、コソボにおける「非暴力派」と「武闘派」の対立を思い起こさせる。コソボではもともと「コソボのガンジー」と呼ばれた、イブラヒム・ルゴバという反政府リーダーが、セルビアからの独立を掲げ、非暴力運動を続けていた。

だが、非暴力に徹したがゆえに、セルビア軍からの弾圧は、逆に昨年後半から強まってしまった。業を煮やした若者たちは、非暴力運動に見切りをつけ、武装組織「コソボ解放軍」(KLA)へと流れ込んだ。最後はNATOの空爆開始によって「国際社会」自らが、武力による解

決方法を選択してしまい、コソボの非暴力運動は、ほぼ消えた。結局、K L Aを中心としたアルバニア系「武闘派」は、アメリカと話をつけ、事実上コソボの「独立」を勝ち取ることに成功している。

そもそも、第三世界の非暴力運動の発祥地であるインドでも、ガンジー以来の流れを組む国民会議派は、先の議会選挙で、より過激な宗教系政党である人民党の連立与党に破れている。つまり、最近の世界情勢から見ると、一般の人々が武器を手に入れやすくなっていることなどを背景に、もう穏和な非暴力運動は、人々を引きつけなくなっていると考えることができる。

ミャンマーの青年たちが、そんな世界情勢の影響を受けたとは言い切れないものの、今回の事件を機に、第2第3のテロリズムが、ミャンマー反政府運動の非主流派として広がり、運動全体が暴力の方向に引っ張られていく可能性がある。

もう一つ考えるべきことは、事件からタイ政府が得たものについてだ。事件発生後、タイ政府による情報収集や対策は、機敏でなかった。たとえば大使館の周辺で、携帯電話や無線が使えないようにする妨害電波発生の措置を、即座にとらなかったため、襲撃犯が外部と連絡をとり、ことを有利に運べる状態が続いた。

にもかかわらず、困窮するミャンマー人の心情を理解し、事件を穏便に解決したということで、タイ政府に対する評価が高まった。同時期に日本で起きた東海村の核燃料事故で、日本政府の対応が強く非難されたのとは対照的だ。

しかもタイ政府は事件後、タイを批判するミャンマー政府に対して、「もともとタイにミャンマー人難民が押し掛けてくる原因を作ったのは、ミャンマーの方だ。他に行くところがない亡命者を受け入れざるを得なかったわれわれが、ミャンマーから批判されるのはおかしい」と反駁した。

これまでタイ政府は、はっきりミャンマー政府を批判することが少なかった。（東南アジアでは、他国の内政問題に口出ししないという外交上の不文律がある）今回の事件を機に、タイがミャンマーへのスタンスを、微妙に変化させていく可能性もある。タイ当局が、事前に襲撃を察知、あるいは関与していたという兆候はないものの、タイ政府が、この事件をうまく使ったのは確かだ。

以上です。大変お勉強になりました。将来の役には立たないが、過去の役にも少しは立ったかな。立った立った、クララで勃った！

『12年前日記 2000年1月25日(火)』

<http://p.booklog.jp/book/43186>

著者：山田夫妻

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yamadafusai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43186>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43186>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.